

Julieta Vartabedian 2015 Towards a Carnal Anthropology: Reflections of an Imperfect Anthropologist. *Qualitative research* 15(5): 568–582.

ジュリエッタ・ヴァルタベディアン「肉体的な人類学に向けて：不完全な人類学者の省察」

### 序 pp.568–569

・80年代から興隆したポストモダン批評では、「客観的」で参与の関係を不可視にしようとしてきた従来の民族誌が挑戦されるようになった。

- 文化の表象の過程が、歴史的、批判的、反省的にとらえられ、民族誌家の個人的な経験が探究の過程の中心へ。
- 民族誌的データは「そこにある」のではなく、知識自体が、調査者／参加者の関係の産物である。

・フィールドワークの間の研究者についての詳細な説明によって、研究者が研究過程にどのように影響を与えているのかを理解することができる。

・この論文では著者がブラジルのトラヴェスティ (*travesti*) と呼ばれる女装した性労働従事者について行った研究で著者の身体の役割について考察する。

### 研究を状況づける p.570

・フィールドワークの詳細

- 場所：リオデジャネイロとバルセロナ。
- 期間：2008~11にかけて合計約1年間。
- 方法：ブラジル人トラヴェスティ、形成外科医、性労働者に関係した NGO 職員への参与観察、綿密な、半構造化インタビュー。
- 関心：身体やジェンダー修正し、性労働に熟練し、さらに多くが国家間移住を経験することで、どのように人々がトラヴェスティへとようになっていくのか。

・トラヴェスティとは

- 男性として生まれるが、女性としての美を追求する。化粧の他、ホルモン注射やシリコンを注入といった加工をするが、男性器は保持。
- ・トラヴェスティの人々は南米の学術および政治的文脈からは排除されてきた。
  - 1950年代から、北米で医療の文脈でインター・セクシャルやトランス・セクシャルに関心が向けられてきたが、トラヴェスティは病理とみなされなかったため、医療の対象にもなっていない。

・著者の自身の女性というジェンダー・アイデンティティはトラヴェスティの人々との関係形成においてポジティブな影響があった。

### トラヴェスティを民族誌する pp.572-573

・リオデジャネイロにおけるフィールドワークにおいて、ある地区のリーダー格のトラヴェスティであるレイナ（仮名）が「鍵となる情報提供者」であった。

・当初、著者はヨーロッパ出身であることが植民地主義との関係でネガティブな印象を与えると考え、スペインにも住んだことのあるアルゼンチン人として自己紹介したが、ほとんどインフォーマントとの距離を縮めるのに役に立たなかった。

・次第に、違い（教育レベル、居住地、社会階層など）を隠そうとするのではなく、違いを前提に交渉していく方法に切り替えた。

- 調査対象の人々にとって「害のない女性」として受け入れられるようになった。

### 分析される著者の身体 pp.573-575

・調査対象の人々にとっての著者の立ち位置：

- 彼等の基準から見て「洗練されていない」女性：称赞されない、スタイルをからかわれる
- ・しかし、こうした立ち位置が彼等との関係形成や彼らの価値観を知るのに役立った。
  - 彼らが著者の胸をからかうのを通じて、彼らがトラヴェスティになる上で重視すること、さらには、彼らの価値観における脱自然化された女性性について著者が考察するきっかけとなった。
  - 化粧を強いられる体験や、持参したカメラで自分が撮られる出来事など、著者自身も研究過程のなかで受動的な位置に置かれる。

### 著者の「写真家」としての新しい役割 pp.575-578

・ある時、ビューティー・コンテストを開催することとなり、著者はそこで個人写真や集合写真を撮ることになった。

- 写真家として彼らの信頼を得るようになった。そこで、写真をいくつかのパターンに分類できることを発見。

・写真家として認知されることで、当初のからかいの対象という存在の時とは異なる角度から彼らと接することが可能になった。

- ・さらに写真自体も、彼らとコミュニケーションをとる媒介物となった。

### 最後の反省：身体化された研究に向けて pp.578-579

・人類学者や社会研究者として、研究への参加者（対象となる人々）の監視にさらされ、好む好まずにかかわらず、フィールドでのパフォーマンスは彼らの価値づけに依存する。

・あらゆる人類学的な遭遇は間主観的な関係、学習過程、研究者の反省性を含む認知的やりとりを要求する。

- 著者のリオデジャネイロでの経験によって、著者の研究の物質的な側面に気づいた
- Warren (2000)が「肉体の社会学」と議論しているのに倣い、「肉体の人類学 (carnal anthropology)」と呼ぶ。
- 研究者の身体は、生産の点であり、理解の媒介だ。「脱性愛化」された著者の身体は、著者とトラヴェスティの人々とのやり取りに影響している。
- さらに、著者は写真家としての立場を得たことで、彼らにとって便利な人という立場にもなった。
- 写真を通じてトラヴェスティの人々の女性化 (feminization) の過程としての美と好色として自分たちを可視化し認識する。

・この民族誌では、研究者と対象の人々の身体は、研究に形と内容を与える差異の空間と遭遇を構築していた。

- ・こうした立場への反省をすることで、人類学的方法論へと貢献する。